

令和3年度 第2回岡山県立図書館協議会

日 時：令和4年2月17日（木）14：00～16：00

場 所：岡山県立図書館 多目的ホール

出席者 ○委員：秋山委員、小野委員、貝原委員（リモート）、工藤委員、小林委員、永田委員、平井委員、宮野委員、湯澤委員

○県立図書館：中本館長、山崎副館長（総務・メディア課長）、笠原総括参事（サービス第二課長）、松本サービス第一課長、鳥越図書館振興課長、神田（有）資料情報課長、神田（尚）総括副参事（企画・メディア班長）

欠席者 なし

1 開会

2 開会挨拶 県立図書館 中本館長 挨拶

3 資料確認

4 協議・報告

(1) 令和3年度事業概要について

資料1

資料に基づき、事務局から説明

【委員】

タイムリーなイベント、色々な展示をニーズに応じて行っているということが興味深かった。ビジネス支援サービスということで、笠岡商業高校の学生たちがここに参加して全国で活躍したとのことだが、資料にはビジネスアイデア創出編と作成編とがある。講師やどういった方が参加したのか？おそらく内容が非常に良かったため活躍につながったと思うので、もう少し詳しく聞きたい。

【事務局】

日本政策金融公庫が主催している大きな全国イベントがあり、その参加に向けたビジネスプラン作成の講座を、岡山では県立図書館が一つの会場となって高校生に参加を募って行っている。講師は日本政策金融公庫から来てくださっており、様々な専門家が高校生にアドバイスしている。

【委員】

最近、高校生や大学生向けでビジネス関係の色々なイベントがある。これはそれなりの権威や伝統があるのか？

【事務局】

今年の参加校は全国から約350校と聞いている。岡山からは笠商の他にもいくつかの

学校が出ており、上位10校がファイナリストということで東京での発表会に臨んでいる。ファイナリストには笠岡商業高校、ほかに高梁高校が、セミファイナルに大安寺中等教育学校と倉敷古城池高校の合同チームが入っている。毎年行われており、今年が9回目である。

【委員】

学校の中だけでなく、社会から学ぶことはたくさんあるので、どんどん参加されていることは良いことだと思う。

【委員】

令和2年度に来館者数が1位になったということだが、過去に高知県が1位になったことがあると記憶している。高知県がカウントを変えたのか、それを上回る岡山県の取り組みがあったのかを聞きたい。

【事務局】

この統計は日本図書館協会がまとめたものである。高知県は、県立と市立が一緒になった施設であり、平成30年度に開館し令和元年度実績でトップとなった。令和2年度からは市立図書館に一括計上したため、都道府県立の調査では未記入とされている。

【委員】

図書館をどこに作るかや、複合施設を作ると数字も増えるので、なかなか難しい。

【委員】

資料にはないが、図書の郵送サービスを行ったと思うが、どのくらい利用があったのか。

【事務局】

今年3回試行した。最初は緊急事態宣言下の臨時休館中に6月8日から17日に実施したもので、6人22冊の利用があった。2回目は8月20日から9月29日までのまん延防止及び緊急事態宣言の部分休館の期間中にも実施したが、3名15冊利用があった。これまでは予約貸出だけを行っていた期間だったが、3回目まん延防止期間中に開館しながら試行したところ1月27日から2月9日までの期間は0だった。

【委員】

有料となると利用が少ないのかと思っている。これはすべて有料か。郵便局に持って行って着払いで送り、元払いで返却するのか？宅配でも何でも往復の郵送料は本人が払うのか？

【事務局】

そうである。いわゆる障害者サービスとしての郵送ではなく、一般の方向けのため、制度的にも優遇制度がないので基本的には利用者に負担してもらっている。ゆうパックで着払いで届けている。返される時も元払いでゆうパックか宅配便を使ってもらおうようお願いしている。

【委員】

片道のみも難しいのか？

【事務局】

来館して返却していただくことは可能としている。実際に来館で返却されたケースもある。

【委員】

片道は郵送してもらって、返却は他の図書館にというのはダメなのか？

【事務局】

市町村を通しての返却はご遠慮いただいた。

【委員】

いろいろな取り組みを見させてもらった中で「お父さんのための読み聞かせ講座」は男性司書によるもので、初めて実施したとのことだった。説明していただいた事業以外で初めてのものがあつたら教えていただきたい。また、新しい企画があつた場合、どのように企画が実行されるのかのプロセスを教えて欲しい。大学の図書館などでも企画の参考になればと思っている。

【事務局】

先ほどの説明の中で主なものと2ページの「オ・カ・ヤ・マ デニム」の展示が初めてだった。その他にも6ページの「テラス de おはなし会」は児童資料コーナーを出たところにあるけやきテラスを使っておはなし会をした。子ども向けだとハロウィンであるとかも児童資料班からアイデアを出してもらっている。

【事務局】

プロセスという点でいうと、例えば「お父さんのための読み聞かせ講座」の場合、男性の育児参加という大きな社会的背景の中で図書館がどんな役割を果たすことができるかをまず担当で考える。このイベントの場合は児童資料班が担当になるが、まず担当がアイデアを上げて、その後図書館全体でどんなバックアップができるかを考える。実際にこのイベントを行った男性司書は児童資料班ではなく他の部署の者である。まずは社会背景や課題、今のタイムリーな話題などをベースにしてそれぞれの担当が発案し、館全体としてどういったバックアップができるか検討した上で、事業化できるものは事業化していく、という流れでやっている。

【委員】

そういったムーブメントが起こっていくのが非常に良いと思った。コロナ禍にあるとついつい内向きになるので、先ほどのテラスでのおはなし会などはメッセージも伝わってくるような気がした。

【委員】

12ページにある1月14日の講座について、今年コロナ禍にあつて、県立図書館での講座は興味はあるが、なかなか県北からは参加できないと思っていた。オンラインでの実施なら参加したかつたと思った。このような講座なら距離があつても参加できるので助かると思う。

【委員】

高校生が参加できる取り組みを色々と進めていただいていることに改めて元気をいただ

いた。岡山県は司書がすごく一生懸命勉強されて、学校の図書館を支えてくれている。なかなか司書教諭が連携できないため、司書を中心に取り組みを進めていただいている。もう少し全体に広げて行けたらと思っている。高校現場での悩みの種は、小学校までは結構本を読んでいたり、小さい頃は読み聞かせをしてもらっていた子どもたちが、中高生になって読まなくなる。部活動との両立やスマホデビューなど色々な事情もあると思う。小学校から中学校までの読書体験をずっと続けて、生涯読書というか大人の読書ができるように自ら求めて読める生徒を育てていくにはどうしたらよいのか、というのが非常に悩ましいところである。子どもの頃から読んでいる本も我々の頃とは違うのかもしれないが、知っていると思う話が共有できない。例えばイソップ物語やわらしべ長者、イザナミ、イザナギの神話であるとか、高校の授業、古典などで出てきた時に、みんな子どもの頃に読んだのではないかと聞いてみても、聞いたような気がするが分からない、とか、なかなかつながってこない。小さい子どもの読書の幅を広げたり、それを中高生にもつなげたりしながら、子どもの頃の体験と高校生になって再会でき、そしてそれを次につなげるということがどうやったらできるのか、と悩んでいるところである。図書館の取り組みを見せていただいたら、家族で来られたり、色々な年齢の方も取り組めるようなことをされているようなので、子どもだけ、中高生だけでなく色々な形で図書館に来られるという企画を、コロナ禍でこれだけされていていたというのは、大変頭が下がる思いだ。学校の図書館は特にそうだが、社会と隔離された場になっていて、一つはなかなか教室に入れない子どもの避難場所みたいになっていて、それはそれで大事なことだと思うが、図書館は外に繋がっている、社会、世界とつながっているというのをどう伝えるかが課題である。

【委員】

今の話と関係ないかもしれないが、地元の図書館が今年やたら廃棄する本を差し上げますと、今までは年2回やっていたのを長期間やっていた。どのような趣旨かわからないが、コロナでなかなか図書館に来られないから持って帰って読むように、ということで廃棄した本を提供しているのかもしれない。県立図書館は本の廃棄はあるのか？

【事務局】

図書の廃棄は基本的には行っていない。本としてばらばらになったり、汚れてしまっただろうしようもない、というような本はやむを得ず廃棄することがあるが、市町村の図書館が行っているような形での館内用図書の除籍・譲渡は行っていない。

【委員】

おそらく廃棄するのは、書庫が満杯でどうにもならないという理由があるのかもしれない。

(2) 令和4年度当初予算案の概要について

資料2

資料に基づき、事務局から説明
意見なし

(3) 岡山県内市町村立図書館の動向について

資料3

資料に基づき、事務局説明

【委員】

美作市の勝田と大原の図書館で月曜日を開館して、土日を休館にするというのはどういう趣旨か？

【事務局】

美作市の図書館は勝田と大原に専任の職員がおらず、中央図書館の職員が兼任している。週に1回ずつそれぞれの図書館に中央図書館から職員が行っているが、それ以外の日は、それぞれの図書館が地域振興局の中にあることから、利用者が来たときに振興局の職員が対応している。話を伺うと、土曜日曜はほとんど利用する人がないということで、土日を休館し、その代わりに月曜を開館することにした、と聞いている。

【委員】

土日に人が来ないのか？

【事務局】

アクセスしづらいところに建物があるようで、地域振興局に用事がある方が用事のついでに図書館を使うというパターンがあるようだ。土日に振興局が休んでいるので、わざわざ図書館だけに行くことがない、と聞いている。

【委員】

奈義町立図書館で利用者カードをスマートフォンで代用ということだが、おそらくスマホでQRコードやバーコードを見せたら利用者カードの代わりになるのかなと思うが、県立図書館の現状や採用の予定があるのかを伺いたい。特にこれから若い世代の利用者増をめざすなら是非とも必要かなと思う。

【事務局】

前回のシステム更新の際にも検討したが、現在は導入していない。スマホで代用する場合、スクリーンショットで映像を撮ってそれを見せれば本人のものかどうか区別がつかないといった懸念事項がある。本物であることの確認をする意味からも、何か映像が動くしくみなど、スクリーンショットと区別できる仕組みができないか、検討していただいたが、そのようなものできないとのことだった。そうするとなりすましのよう危険性がある。また、児童カウンターに家族単位で来られる場合、今でもカードを持っていれば、複数枚出されても対応しているところであるが、特に子どものカードを親が管理しているケースが非常に多いということもあり、表示に手間取ってカウンターが混雑するなど、便利なようでスムーズに行かないのではないかと考えている。本来カードは本人が持っている本人しか利用できないという前提がある。あと、自動貸出機が対応していないため、利用はカウンターに限定されるなど、懸念事項があるため今のところ見送っている。

【委員】

奈義町立図書館はこのあたりをどうクリアされているのか、あとメリットも大きいと思うし、他の業界ではどんどん採用されていていっているので、是非検討してほしい。

【事務局】

引き続き検討していく。

【委員】

個人のスマートフォンの中に奈義町アプリというものを持っている。アプリの中に奈義町で行われる色々なサービスや図書館のサービスや催しが流れてくる。個人登録をしているアプリなので、その中で本の貸し出しもできたりする。町内以外の人でも図書館を利用しているかもしれないが、奈義町は若干小さい町なので、町内の人間として顔パスのような感じでわかる。スマホをかざして貸し出しはできるのかもしれないが、自分は利用していない。情報をアプリでもらうということは浸透しているが、それを使ってどのくらいの割合の人が貸し出しをしているかまでは分からない。様々な情報を見ることができるのはとても便利なので使わせてもらっている。

【委員】

他の県立図書館レベルでやっているところはあるのか？

【事務局】

新しい図書館システムには標準的に入っていて、倉敷市立図書館にも入っていると思うが、今何館が採用しているかまでは分からない。県立図書館でもかなりの館が採用されていたかと思う。

【委員】

何らかの形で調べてみて、どういう課題があったり利便性があるか検証した方がよい。そのうちマイナンバーカードで借りられるようになるかもしれない。

【事務局】

マイナンバーカードではすでに借りられるようになっている。

(4) 岡山県職員へのアンケート結果（概要）について

資料4

資料に基づき、事務局説明

【委員】

レファレンスの経験の欄で、ほとんどの方が「ない」と回答されているが、つい先月自分もレファレンスサービスを受けた。その時も、職員の皆さんのスキルの高さややさしい対応に感銘を受けた。レファレンスがこんな感じのものだとイメージが湧くようSNSやホームページを通して告知をしてもらえれば気楽に利用しやすくなるのではないか。具体的な経験としては、2階のスタッフの方に大人のADHDに関する資料を探してもらった。関連する書籍がある場所も含めて3カ所の書棚を案内してもらった。最近では色々なサイトやアマゾンやオンラインのブックストアなどで検索することはできるが、それぞれのレビューも最近は疑わしい感じもある。こうやって自分で手にとってニーズにあった本を選ぶことができると本当に良かったと思う。普通に利用されている方は、カウンターまで行って、忙しそうにしている職員を呼び止めてぼんやりとしたことを聞きづらい。カウンターは読書上級者が質問をしに行くところだ、というような印象をほとんどの方が持たれ

ていると思うので、そうではなく、気楽に相談したらやさしく教えてもらえて、すごく役に立ったということをもっとみなさんにフィードバックしたら、たぶん利用のハードルが下がるのではないかな。

【委員】

今の話に追加だが、自分たちの周りでも「レファレンス」という言葉の意味をあまり理解されていないという感覚が強い。図書館の司書にたくさん本を紹介してもらったり日常的にしてもらっているが、それがレファレンスだったんだ、みたいな感覚で周りの人たちと話すことがある。この「ない」の78%は本当にはないのか、もしかしたらあるのかもしれないが認識されていないのではないかなとも思った。

【委員】

高校生の時に放送文化部に所属していて、高校2年生の時に県立図書館のレファレンスサービスについてのテレビドキュメント動画を作成した。その際に、本を探していると伝えたら、1分30秒くらいで色々な種類の本を探してきて下さって、素早い対応を取り上げたこともある。このようなすごさが分かる動画などを玄関のあたりに流してレファレンスサービスの良さを映像で分かってもらうというのも一つの手段かと思う。

【事務局】

レファレンスサービスについて色々ご提案をいただいてありがたい。全国的にもレファレンスサービスをいかに周知していくかが大きな課題である。せっかくこれだけの資源があるのになかなか使われていないという実態がある。今仰っていただいたように具体的な内容をSNSなどで発信しようとしている。例えば、こういう質問に対してこういうことをしました、や、こんな質問でもいい、など。

レファレンスという言葉自体もなかなか難しいので、例えば調査・相談などであったり、やさしい日本語に言い直してみるとか、そういったことから始めていきたい。

県庁職員に対しては、例えば教育のICT化について何か資料がほしい、であればこんな資料があります、と具体的にサービス内容を知ってもらうということで行政支援につなげていきたい。

【委員】

レファレンスとは何か、という人はたくさんいると思うので、よろしくお願ひしたい。

(5) フリートーク

《テーマ》

資料5-1

資料5-2

資料に基づき、事務局説明

【委員】

最近 Facebook やインスタの勉強をしている。8秒くらいの短い動画がかなり見られるようになってきている。ライブ映像の短いものを上手に活用したら良いのではないかなと思う。また、先ほどから皆さんが仰っていた、こんな時助かった、これが良かったなどの声

をハッシュタグでアップしてもらおうと、図書館の方でフォロー返しができるというようなシステムが色々なところで使われていると思う。たくさんの方の県立図書館ファンの方に協力いただきながら色々なところに発信していくという方法も面白いかなと思う。インスタにも Facebook にも結構県立図書館がハッシュタグで出てくる。フォロワーや閲覧してくれる人を増やしていくためにライブ映像を上手に使っていくのも良いのかなと思う。

【事務局】

当館から発信するだけでなく利用者に発信してもらいたい。その方が共感を得られるのではないかなと思う。今そういった工夫がこれからできないかと考えている。一方的な発信ではなくファンの方に発信してもらおう、こういった形が大事なのではないかなと思う。

【委員】

レファレンスという言葉が今回いただいた資料で初めて知った。長女が大学の推薦入試を受ける際に小論文を提出するというので、課題が「自動運転の実用化について」というようなものだった。ダメ元で県立図書館に行って本を探して来い、と言ったところ、おそらく司書に相談したのだと思うが、非常にタイムリーな本と資料を出していただいたり、どこで手に入れたら良いかわからないような公的な統計資料もいただいて非常に助かった覚えがある。それがまさにレファレンスだったのかと今気がついた。特に学生とかビジネスなどで資料など論文を作る際に非常に役立つのかなと思う。まずは、例えば高校とか、大学とかそういったところにピンポイントで案内を送るなど初めてみてはいかがか。

【事務局】

レポートを書くときに役に立つという声はある。また、企業やビジネスマン対象のデータベースも結構あるし非常に豊富な資料がある。それをさらに司書が支援できる。今後、経済団体などにも説明する予定である。また、大学などにポイントを絞って具体的に説明していくのが良いかと改めて思った。

【委員】

レファレンスについて、イギリスの大学に行っていたことがあるが、そこでは図書館のレファレンスは「要」というような形だった。博士号をもっているような人がレファレンスに行って、どういうふうに学び始めたら良いのかとか、論文を書く段階ではどの領域からタッチしたらよいのかというところで、長い列ができていたのが非常に印象的だった。最近司書の数が少なくなっているということがある中で、レファレンスがいかに専門性の高いスキルなのかというところを周知していくことは必要なことだとかねがね思っている。具体的な取り組みというところで言うと、以前話題になった言い間違いの本を探した「100万回死んだ猫」などは図書館が編纂されていた。レファレンスが、言い間違いを探すという少し面白いようなものから、かなり専門性が高いところまで網羅しているので、情報を蓄積していく時に、こんなほのぼのエピソードやこんなふうに学術的に役立つというエピソードなどを蓄積していくと、Facebook にしたりヤフーや冊子にしたりしてアウトプットするときに役に立つのではないかな。冒頭、新しい取り組みがたくさんあったと思うが、高校生や大学生など学術的な資料を読み始める人たちにとって、専門性つなげてくれる人がなかなかいない。小論文を書くといった場合、高校の司書が手伝ってくれ

るのだと思うが、生徒によってはどこからはじめてよいのかわからない、クラスの中には一般入試に向かう人もいて、先生も手が回らないということが結構ある。例えばタイトルも分かりやすく「レファレンスを利用して小論文を書いてみよう」みたいにかなりターゲットを絞って取り組みをしていくとか。大学の初年次教育でレファレンスを使っていくというのは伝えていかないといけないが、その前の段階の高校生、特に不読が多い世代に、いろいろ読まれている本を展示していこうという話が前回あったと思う。本当に必要なときに役に立つという実体験とかがあると波及していくのではないか。ぜひともエピソードを蓄えながら、アウトプットの仕方も先ほどの話にあった動画やインスタだったり、本ももしかしたらあるかもしれないので、使えるアイデアがあればよろしくお願ひしたい。

【委員】

高校現場では生徒たちにいかに探究活動を進めさせていくかが大事な問題になってきている。今後入試スタイルが変わって、推薦やAOが増えていくとますます自分で語れる、自分で問題意識を持って、自分をアピールする力が求められてくる。生徒がどうやって問題意識を整えていくのか、高校1年生で深刻な問題となっている。文理選択が1年からあり、理系か文系か、興味のある分野でもあれば選べる。しかし興味のある分野がない生徒は、本当に悩むことになる。高校現場としては1年から段階を追って探究活動を興味に沿ってやっていくプログラムをたてようとしてはいるが、余り問題意識のない生徒は、ニュースに目が行かないということもあって、社会を見ても何が問題になっているか、自分にどうつながってくるのか、自分の長所がどう活かせるのか実感しにくいので、自分の問題としていくためにも探究活動の役割は大きい。今回テーマを色々示してあるが、自分の興味のあるテーマで探究活動をすすめていく際に、図書館はなくてはならないところだと思う。教員も関わらなければならないが、例えば経済に興味があるとか地域活性化に興味があるといても、で？というところから先に進まない。そのため、司書が丁寧に聞いて下さって、1時間に数人でもきちんと話ができる関わり方をして下さると生徒の中で何かひらめいたり、自分の問題意識につながっていく。生徒が自分でテーマを決めていく、問いを立てていくのが難しい。それを高校でしっかり学んでおけば卒業した後大学で、それから社会に出たら今度は地域の図書館でという市民教育につながっていくのだろうと思う。先ほど司書が頑張っているという話もしたが、去年からとりかかかき、今年度探究学習の取り組み方を動画にしてくださった。それを岡山県のSLAのホームページで公開している。高校現場は、大学入試の時になって何も書けない、考えられないという生徒に本当に困っているという現実がある。探究の仕方、レファレンスという言い方も動画の中では少しずつ生徒に伝えているが、知識をいれるだけでなく、知識をどう使うか、何ができるようになるか、が今大切になっているので、頑張っていないといけないと思っている。ただ、生徒が一人1台端末を持つ時代になったので、逆に図書館に来てくれないという問題もある。それとの共存がこれからの現場では課題になっていくかなと思う。探究を深めるとやはり学校の本だけでは足りなくて、県立図書館にお願いして本を配送していただいている。その意味では本当にバックアップしていただいているな、と思っているので、今後ともよろしくお願ひしたい。

【委員】

仕事柄毎日のように図書館へ来て、様々な分野の本を借りている。振り返ると、レファレンスを利用してものを調べるデビューは大学の卒論だった。それが今は高校生、中学生と年齢が下がっている。どの世代の人にアピールしていくか、ターゲットを絞る必要があるのかなと思う。それに関連して、子育てを始めて子どもに本を読ませたいと思って図書館へ通い出してくる若い親というのも結構いると思う。そういった親世代の人たちに、色々聞いてみれば教えてもらえるという体験をしてもらうというのが親と子と両方をレファレンス利用者として育てていく良い入口になるかもしれないと思う。自分も子どもが小さい頃、赤木かん子さんという方の講演に行ったことがある。「本の探偵」と名乗られていて、「子どもの頃こんな人が出てきて、こんな主人公が出てくる、こんな話を読んだ。子どもに読ませたいが何の本だったか覚えていない」というものを調べて出してくれる方だ。あれもレファレンスかな、というようにも感じる。司書の方は「本の探偵」だし、人間Googleみたいな検索エンジンでもある。最初は少し敷居が高いかもしれないので、レファレンスという言葉と同時に、何をするかイメージが湧くような実体験というものを発信して行ってほしいと思う。また、少し前にこの図書館でびっくりしたのが、浮世絵など地域の古い資料も出して下さって簡単に見ることができる点。郷土資料コーナーは図書館上級者や年配者しか受け付けないイメージだが、岡山の昔の人たちが書いたようなものやガイドブックのようなものもあって、誰でも見ることができる。なので、2階だけでなく、館に入ってすぐのあたりでそうした資料もあるとわかるような展示もしてもらえたら、少しずつ奥へ奥へと入っていく人は増えていくのではないかな。少し前に入り口付近で小川洋子さんのPOPの掲示をしていたと思う。同じあたりに何か質問があったら答えてくれる、と分かるような具体例を出すというのはどうか。

【委員】

確かに2階にあるというのは知られていない、というのはある。2階にも気軽に利用できるものがある、というの知られていないので、1階に何か分かるものをした方がよいかもしれない。案外2階まで上がる人は少ない。

【委員】

今、地元の図書館がずっと臨時休館のために予約のみの貸出をしている。高齢者の方が予約されることが多いが、インターネットが全然使えない方が多く、電話で予約をされる。ネットやTwitterなど全く見たことがないといった高齢者の方も非常にたくさん図書館を利用している。そういった方に本以外の利用をどう訴えかけることができるのか、高齢者サービスという観点で考えた。やはりホームページなどで発信してもなかなか見て頂けない。高齢者の方向けにどのようにPRしたら良いかを考えていて、チラシを作って配付するとも考えているが、チラシも本当にわずかな時間、一瞬しか見られない。全戸配付もするが、ほとんどの場合捨てられるということが多い。県立図書館でもPRされているが、高齢者の方は良く新聞などを見られているので、新聞にコーナーを設けてもらってレファレンス事例や、図書館でできること、図書館にあるものを紹介してもらってもよいのではないかな。テレビや新聞というのは高齢者の方はよく見られるので、そういったところ

でサービスができることを紹介すると届くのではないか。

【委員】

新聞をとる人がびっくりするほど減ってきた。高齢者にどう伝えるか、というのも難しい。自分も含めネットなどなかった時期に人生の大半を生きてきた人たちなので。これからネットをやれ、と言われても難しいと思う。学生は大学の図書館をしっかりと活用しているのか？

【委員】

大学の図書館は割と色々な本が揃っているのですが、本自体はあるが、課題に関連する本を借りようとする、他の人も同じ課題に関連する本を借りているということがある。例えば教育なら「教師用指導書」、特別支援なら「ADHD」に関する本などが全部借りられてしまっている、本の種類はあるが借りたい本がない。そのようなときに県立図書館の本なども活用すべきかな、と思う。

【委員】

非常に課題が多くある。レポートを書くために借りるという形で、以前一人当たりで貸し出す冊数が全国で何位ということも聞いたことがある。本当に必要に応じて自分の心を耕すような本を読んでいるかということ、そこが課題だと思っている。色々な形で小さな読書会を開いてみたり、ロングセラーや昔からあって教員は知っているだろうと思う本が実は読まれていない、ということもあるので、あえて課題図書のような形にしてみたりというような取り組みもしているというような状況である。西栗倉の図書館だったと思うが、村内の色々な所に本を置いているとの話で、元のアイデアは島根の「島まるごと図書館」だと思うが、図書館だけにとどまるのではなくキャリアサポートの部署であれば、進路選択に関連する本があるとか、本がすぐ手に届くところにあるという環境づくりをした方がよいと思った。課題は非常に多くあり、改善していけそうなところもあると感じている。

【委員】

学校の教育内容もずいぶん変わってきている。教員がしゃべって終わりというような教育はダメだということになっている。どんどん発信ができる人間を作れとか、学校も大変である。教員の方はそういった教育を受けてきていない。その観点では図書館が役に立つというのを学校に知ってもらえるのも良いのかもしれない。新しいカリキュラムが出たら、総合教育センターなどの研修講座で研修はするのだろうが、ずいぶん大きな変わり目になっている。これが本当に世の中が期待する人材の育成になっているのかわからない。どうしてもテクニックに偏って、小論文でも同じようなものがたくさん出てくる。どれを読んでもみな同じ、予備校みたいなところで教えられたものがそっくりそのまま出てくる、という傾向がある。テクニックに偏るのもどうかと思う。

【委員】

まず調べたいことがないとレファレンスもいらないわけで、何かテーマを投げかけるといいう取り組みも必要かと思う。

【委員】

子どもがよい本がないかと自分に聞いてくる一方で、今やネットでは本の要約チャネル

ルがいっぱいある。特に実務書などは5分から10分で内容がものすごく良くまとまっている。それを見れば、まさにその本を読んだかのように誰にでも語れるという状態ができあがっている。それを見る人はまず本は読まないだろうな、という環境を感じている。その反面、作家であるとか人気のある方が紹介する「小説の紹介チャンネル」もものすごく人気だ。本当は心を震わせるような読書体験をしたいが、あまりにも読書ビギナーで感動する本がないかを聞きたいが聞けない。図書館に行っていきなりそれをレファレンスで投げかける勇気はないけれど、もし図書館でそういう心を震わせる本を知る場があれば、調べごとをすることはもちろん、ものすごく役に立つ場であることは間違いない。長い期間、リピーターとして図書館を訪れて、読書をする喜びというものを身につける本来の目的もまた、若い人が求めているものだと強く感じる。TwitterであるとかFacebookであるとかはコメント欄がある。みなさん発信したいという欲求もすごくあるので、運営的に可能なことなのかどうか分からないが、例えば「あなたのオススメの本教えてください」という投げかけをしたら、たぶんものすごい数が返ってくるであろうし、それがまた誰かの感動本を発見するきっかけにもなる。例えばSNSを使う事になれていない年代の方であれば、皆さんの感動本であったり読書の背景であったり、小さなコメントなどを掲示板で共有することができれば、とりあえず図書館に行ってみたら何か読みたい本が見つかった、ということにつながるのではないかな。レファレンスもカウンターが忙しそうでも無理でも、何か見つかるかも、という可能性もあると感じている。みんな本を読みたいという気持ちは心の中に持っていると思うので、図書館からの発信だけでなく利用者や読書上級者からの知識を共有する場になる方法が何かあればいいなと思う。

【委員】

SNSの発信についてだが、情報の発信力はすごいと思う。その一方で、それを見る方、友だちになっていただく方をどう増やしていくかが重要だと思う。Facebookでも県立図書館で検索をすれば誰でも見えるようになっていっているので、情報の発信はできているのだろうが、友だちの確保にどう取り組んでいくのが重要だと思う。レファレンスサービスの部分について、先日ニュースを見たが、北海道の北見市にある水族館で、ボタンを押すと館長が動物の説明をしてくれるといったサービスがとても人気で、今では水族館より館長のTwitterの方がフォロワー数が多いとのことだ。同じようなもので言えば、ホームセンターのそれぞれのコーナーにボタンがあって、押したら店員さんが来て説明をしてくれる。このような身近に感じていただけるようにしてはどうか。2階に行くのではなく、ボタンを押せば来てくれて説明するというサービスもあってもいいのではないかなと思う。

【委員】

今回、リモートでつなげてもらえたので、参加できて良かった。距離なくこのようなことができるのはコロナになってからのことだ。大きな成果だと思う。朝読などに地域のボランティアが入っていけなくなっている。ちょっと本の紹介であるとかブックトークであるとか、色々なものが手に取る形や、色々な方法で子どものもとにもっと届くと良いと思う。